

【旧約聖書日課】エゼキエル書 43章1～7節

¹それから、彼はわたしを東の方に向いている門に導いた。²見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から到来しつつあった。その音は大水のとどろきのようであり、大地はその栄光で輝いた。³わたしが見た幻は、このような幻であった。それは彼が町を滅ぼすために来たとき、わたしが見た幻と同じであった。その幻は、わたしがケバル川の河畔で見た幻と同じであった。わたしはひれ伏した。⁴主の栄光は、東の方に向いている門から神殿の中に入った。⁵霊はわたしを引き上げ、内庭に導いた。見よ、主の栄光が神殿を満たしていた。⁶わたしは神殿の中から語りかける声を聞いた。そのとき、かの人かわたしの傍らに立っていた。⁷彼はわたしに言った。「人の子よ、ここはわたしの王座のあるべき場所、わたしの足の裏を置くべき場所である。わたしは、ここで、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。二度とイスラエルの家は、民も王たちも、淫行によって、あるいは王たちが死ぬとき、その死体によって、わが聖なる名を汚すことはない。

【使徒書日課】使徒言行録 1章12～26節

¹²使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。¹³彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。¹⁴彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

¹⁵そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。¹⁶「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。¹⁷ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。¹⁸ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。¹⁹このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。²⁰詩編にはこう書いてあります。

『その住まいは荒れ果てよ、
そこに住む者はいなくなれ。』

また、

『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』

21・22そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」²³そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、²⁴次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示してください。²⁵ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです。」²⁶二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。

【福音書日課】マタイによる福音書 28章16～20節

¹⁶さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。¹⁷そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。¹⁸イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。¹⁹だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、²⁰あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

天に昇られる【こども説教のために】

十字架の上で死なれて三日目、ご遺体が葬られていたはずの墓が空っぽであることを発見した弟子たちは、かわりに、集まる彼らの間に現れてくださる主イエスのお姿を見るようになっていました。「主イエスのご復活された。今も生きて共にいてくださる」と、弟子たちは言い始め、主イエスの教えや為さったことを思い出しては、語り合うようになっていました。

主イエスが現れてくださってから40日目、弟子たちは、かつて主イエスと共に何度も登った山の上にはいました。山の上で、主イエスはいつも、教える語ってくださったり、一人祈られたりしていたのです。けれども、そのときは少し様子が違いました。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」とおっしゃるのです。主イエスが教え、為さっていたことを、これからは弟子のあなたがたがしなさい、と言うのです。弟子たちは、戸惑ったかもしれませんが、「自分たちだけで、できるだろうか」と。けれども、主イエスは、その日、山の上から天へと昇って行かれてしまわれたのです。

残された弟子たちは、祈りながら、一つのものを待ちました。主イエスが約束された《聖霊》です。「聖霊を受けなさい」(ヨハネ 20:22)。《聖霊》が降るとき、弟子たちは、主イエスをご覧になられていたものを見るようになるのです。そのときには、もう迷うことなく前に進むことができるでしょう。

《主の復活の証人》

説教卓（聖書朗読台）に設置してきたアクリル板を、今日から完全に取り外しました。三年間、ここに立つたびに、アクリル板を通して皆さんと対面してきましたので、もはやそれが当たり前の風景になっていました。けれども、たとえ透明なアクリル板と言えども、そこにお互いを隔てるものがあったのは間違いありません。ある方は、「礼拝中、アクリル板が風で揺らぐので、めまいがしてくる」とおっしゃっていました。説教中、目を上げて説教者をご覧くださいからでしょうか。そのことに、わたしは気づいていませんでした。ここにアクリル板を置くようになってから、わたしは、説教中に皆さんの顔を見ながら話すことが少なくなっていたかもしれません。お互いに顔を上げて、目を向け合うということが、たった一枚のアクリル板によって遮られていたのかもしれません。

母教会で過ごした青年時代、教会学校の奉仕のほかに、外に出て行って「子ども会伝道」をする活動を仲間たちと共にしていました。ある場所の「子ども会」で子どもたちに受けがよく、必ずプログラムに組み込んでいた「神さまお願いゲーム」というゲームがありました。参加者に白紙が二枚配られて、まず一枚目に「神さまへのお願い」を書きます。続いて二枚目に、「神さまからの答え」を書きます。それぞれ回収してシャッフルしたら、「神さまへのお願い」を一枚取り出して読み、続いて「神さまからの答え」を一枚取り出して読み上げるのです。子どもらしいお願いに対して思いがけない神さまからの答えが与えられ、ときに大うけして笑ったり、思わず納得してうなったりと、大いに盛り上がるゲームでした。このゲームで、仲間の一人が必ずちょっとした演出をしていたのも、盛り上がった理由だったのかもしれません。それは、「神さまからの答え」の読み上げを、隠れたところでマイクを使ってする、という演出です。子どもたちには、それが本当に神さまからの声のように思われる効果があったようなのです。

神は「見えない」からよいのでしょうか。説教者も、「神の言葉」を語る者であるのならば、あまり目立たず、できれば見えないほうがよいのかもしれません。アクリル板くらいで遮られていると、ちょうどよいのかもしれません。

かつて西欧の古い教会は、司祭がもっぱら祭壇に向かって礼拝を執り行っていました。ほとんどの場面で、会衆には背を向けていたのです。それにも一理ありました、皆が「見えない神」に集中するためには。

けれども、現代の教会は、どの教派でも、牧師・司祭も会衆同士も対面するような配置で礼拝を進めます。「見えない神」を心眼で見ようとするよりも、現に「見える人」を互いに見ながら礼拝をするのです。わたしたちには、目の前に見える「**主の復活の証人**」が互いに必要だからです。

「いつも共にいる」

「使徒言行録」が「**主の復活の証人**」と呼ぶ使徒たちは、天に昇られる主イエスを見届けるために、山に登りました。「マタイ福音書」は、その山がガリラヤにあって「**イエスが指示しておかれた山**」だったと伝えています。十一人の弟子たちは、そこで主イエスにお会いし、ひれ伏したと言われていすから、礼拝をしたのでしょう。彼らは「**主の復活の証人**」なのですから、主イエスにお会いして礼拝するのは、当然かもしれません。ところが、不思議なことに、その中には「**疑う者もいた**」というのです。

「信仰とは 99 パーセントの疑いと 1 パーセントの希望である」と言った人がいました（遠藤周作が作家ベルナノスの言葉として引用）。99 パーセントが疑いかどうかはわかりませんが、たとえ長年教会生活を続けている信者であっても、一点の疑いもないというような者はいないでしょう。礼拝に集められているわたしたちの間に、「疑う者もいる」のは、間違いありません。

神学校の仲間の一人が、卒業間際、二人で雑談中に、「自分は、キリストの復活がどうしても信じられない」と言ったことがありました。彼は、そのまま牧師になりました。爾来、どちらかと言えば保守的な教会ばかりで牧師を続けています。わたしは、彼が牧師失格だとは思いません。むしろ、自分の信仰に「疑い」があることを認められない牧師のほうが危うい、ときえ思います。「見えない神」なのです。主イエスも、今は「見えないお方」なのです。弟子たちは、主イエスが墓から見えなくなり、天に上げられて見えなくなったと、二重に「見えないお方」になられたことを伝えています。

そうであればこそ、弟子たちは、「証人」を信じることへと導かれたのでしょう。「主イエスが現れられた」、「主イエスは生きていらっしゃる」と証言する者を信じたのです。そのように証言する証人は、確かに、今も主イエスが共にいるように生きていられるので、その教えと実践に倣って。

「見えない神」を崇め、「見えないお方」に従おうとするとき、だれかが「見えない神」や「見えないお方」の代わりになる必要はありません。だれもが、「主イエスと共にいる者」として互いの前に立てばよいのです。たとえ疑い深くあるときにも、ほかの者が「証人」として生きてきたことを信じて、そうすればよいのです。疑いを拭えない自分を信じられる者にしようと足掻き続けることはありません。ただ、主イエスが共にいるように生きてきた者たちの群れにとどまればよいのです。そこに加わればよいのです。

そう願う者を「弟子」として招くように、「**父と子と聖霊の名によって洗礼を授ける**」ようにと、主イエスは弟子たちに命じられました。弟子たちから始まった教会は、今も、疑い深い人々に呼びかけて言うのです、「そのまま弟子になりませんか。そのしるしとして、洗礼をプレゼントします」と。